

国語

(分析は一般入試Aの問題のみです)

出題傾向

※第二問は現代文または古文のどちらか選択

入試日程	大問	問題文筆者・書名 (出典)	難易度
2/3	第一問	前田健太郎『女性のいない民主主義』	標準
	第二問 【古文】	『和泉式部日記』	やや難
	第二問 【現代文】	柿木伸之『ヴァルター・ベンヤミン——闇を歩く批評』	標準
2/4	第一問	住吉雅美『あぶない法哲学 常識に楯突く思考のレッスン』	標準
	第二問 【古文】	『平中物語』	やや難
	第二問 【現代文】	伊庭崇『構成主義の学びと創造』	標準
2/5	第一問	國分功一郎『中動態／意志／責任をめぐって』	標準
	第二問 【古文】	『狭衣物語』	やや難
	第二問 【現代文】	築山節『フリーズする脳 言葉が止まる、言葉に詰まる』	標準

【現代文】

2021年度は、すべて評論文の出題、ジャンルは、政治学、法哲学、哲学、言語論、心理学、医学と様々である。多くは論理展開や論旨の比較的確かな文章の出題である。

設問は、漢字、語句の意味、接続詞副詞や語句の空所補充、傍線部の内容説明または理由説明、その他内容理解に関する問題、趣旨合致、内容合致など、入試の定番である。設問数は第一問で9～12問(マーク数12～20)、第二問で12～13問(マーク数12～13)。解答形式はすべてマークシート方式(原則として五者択一)である。設問全体の難易度は、総じて標準であると言える。

○第一問

文章量は、約4540字～5240字程度で、2020年度より長くなっている。設問内容は漢字の書き取り、語句の知識を問う問題、空所補充問題(接続詞副詞・語句)、内容理解に関する問題、内容合致など。

○第二問

文章量は、約3530～5370字。設問内容は、漢字に関する問題が少ないだけで、第1問と比べてあまり違いはない。

【古文】

2020年度の出典は鎌倉期、江戸期の文章で、説話、評論、仮名草子であったのに対し、2021年度はいずれも平安期の文章で、日記、歌物語、作り物語であった。文章量は、約1140～1540字。いずれも本格的な文章で主体客体の省略も多く手応えのあるものだった。設問数は10～16問(マーク数15～19)で、2020年度より増加している。設問内容は、単純な語義の問題は比較的少なく、文法、文学史、修辞、主体判定、敬意の対象、解釈、内容理解など多彩である。具体的な傾向は以下の通り。

- ・ 解釈の問題は、単なる傍線部の直訳ではなく、前後の内容を踏まえて判断しなければならないことが多い。2/4では、意識として適切なものを選ぶ問題が4問出題されている。
- ・ 文法問題は、語の識別、品詞分解、助動詞の意味という出題であった。
- ・ 内容理解型の問題は、文章の中で起こっている事柄の読み取り、登場人物の心理や思考の理解など深い読解力が必要なものが多い。
- ・ 2020年度に比べ、主体判定や敬意の対象など、省略されている主体客体の把握ができていないかどうかを問う設問が多かった。
- ・ 2019年度2020年度に引き続き文学史の問題が、三日程とも出題された。
- ・ また2/3では、問題文が二つ出題され、二つの文章にまたがる設問(問12)が出題されている。これは共通テストを意識したものであろう。

総じて、幅広い知識と、文脈を正確に読み取る力、選択肢を丁寧に吟味することを要求する問題である。解答形式はすべてマークシート方式(原則五者択一)。設問全体の難易度は、2021年度はやや難であった。

国語

(分析は一般入試Aの問題のみです)

学習対策

【現代文】

●筆者のイタイコトをつかまえよう

評論の筆者は自分の意見（イタイコト）を読者に伝えるために文章を書く。しかし、それをそのままぶつけても誰も納得してくれない。そこで、論拠を挙げ論理的に説明を加えて自分の意見に説得力を持たせようとする。入試現代文は、その筆者のイタイコトと論の展開を、受験生がしっかり把握できたかどうかを調べるために設問設定をしている。よって、問題を解く際は、まずこの文章では何がテーマ（話題）になっているのかを理解し、接続詞や強調語などを道しるべにし、筆者の論の展開を正確にたどり、最終的にこの文章のイタイコトはこれなのだ把握するようにしよう。そのためには、普段から新書レベルの読書を心掛け、ただ漫然と読むのではなく、各章・各節で上記のことを意識するとよい。問題集に取り組む際も同様である。

●幅広く国語の知識を身につけよう

梶山女学園大学では、第1問・第2問を通して漢字や語句など、知識を問う設問も多く出題されている。知っていれば解ける問題である。漢字の問題集や国語知識の問題集に取り組み、評論でよく使われるような語句などをマスターするとよい。また普段の生活や読書を通して、知らない言葉や事項に出会ったら、こまめに辞書や国語便覧を調べるなどして語彙力や知識を身につけるよう心掛けよう。漢字の問題集に取り組む時も同様である。また文学史が出題されることがあるので、問題集や国語便覧を通して、著名な文学者とその作品名、主義、流派などを覚えておこう。

●マークシート方式問題になれよう

共通テスト対策問題集やマークシート方式の私大対策問題集に取り組もう。ただやみくもに読んで何となくピンと来た選択肢を選ぶのはいけない。繰り返しになるが、その文章のテーマが何で、どういう論理展開がされ、どのような結論（イタイコト）を導いているのかを把握したうえで、設問に取り組むこと。マークシート方式の問題集は上記のことが押さえられていれば選択肢を一つに絞れるように作られている。解答に迷った時には、選択肢をじっくり見て考え込むのではなく、もう一度設問が何を問っているかを考えたうえで本文に立ち返り、本文と選択肢、選択肢相互の異同を照合して判断するようにしたい。また全体の設問量が多いので、過去問に取り組んで、時間配分の練習をしておくとうい。

【古文】

●基礎知識の充実をはかろう

古文の問題も、単語や文法、文学史などの基礎知識を問う問題も多い。また、解釈問題はかなり意識した選択肢が正解で、一見高度な問題に見えるものも多いが、まずは文法や単語知識で選択肢を絞り、その後に本文内容と照らし合わせて確認すれば正答率が上がるはずである。ベースは基礎知識である。

古語については400～500語程度を単語帳などでマスターすること。重要古語のほとんどは多義語であり、複数の訳し方を身につけておく必要がある。その語の語源・語感を理解したうえで訳し方の幅を押さえ、例文の中でふさわしい訳語を選ぶ練習をすること。

文法は用言の活用を基礎として、助動詞の接続・活用・意味・訳し方、助詞の意味・訳し方、敬語の種類・用法をきちんと覚えておくこと。「なむ（なん）」「らむ（らん）」「なり」「ぬ」「に」「る・れ」など頻出の識別問題にも慣れおきたい。以上のような文法知識は解釈問題の選択肢選びの際にも強力な武器になるはずである。文学史、古典常識についても地道な努力をしよう。

●一人で文章を読み解くことに慣れよう

上記の基礎知識を身につけつつ、私大対策の問題集等を通し、実際の問題の中で知識を使って解く練習をしよう。問題文の中で学習した単語に出会い、その文脈での意味を考えたり、傍線部の中にある重要古語、助詞・助動詞、敬語に着目して選択肢を絞ったり、あるいは解けなかった問題、間違えた箇所に含まれる単語や文法事項を辞書や文法書でしっかり確認したりすることで、基礎知識の定着をはかろう。また、問題集で出会った作品について国語便覧を使って文学史を調べたり、設問に出てきた古典常識について学習するなど、知識が身につく、正答を導くような学習をしよう。

●作品として味わおう

解釈の問題、内容理解の問題では深い読解力を要求するものもある。問題集で文章を読む際、単に語学的な分析（単に現代語に置き換え訳す）のレベルでとどまるのではなく、その文章の中でストーリーがどのように動いているのか、この箇所ではどういう事柄が起こっているのか、この部分で登場人物がどんな心理状態にあるのかを読み取るように心掛けよう。また、セリフについても、ここでその登場人物はどのような意図でそんなことを言うのか、なぜこんな発言をするのかまで考えて、作品を味わい、深い読解力を身につける努力をしてほしい。